令和６年能登半島地震被災地の皆様に心よりお見舞い申し上げます。

広報 中部の森林（もり）

写真：「ピラミッドピークから見た穂高連峰と朝日」
(中信署、飛騨署管内)

私の森語り「川を育む森を思う」
豊田市矢作川研究所　主任研究員　洲崎 燈子

令和６年　年頭のご挨拶
・中部森林管理局長　今泉 裕治
各地からの便り
・素材生産事業の現地検討会を開催　ほか
シリーズ
・森林官からの便り、私の森語り、中部の保護林、
秘蔵写真・今は昔の林業

※令和６・７年度「国有林モニター」の募集のお知らせ！

国民の森林・国有林
林野庁中部森林管理局
2024/No.238

お役に立ちます国有林
―地域課題の解決に向けて―

中部森林管理局長　今泉（いまいずみ）　裕治（ゆうじ）

令和六年　年頭のご挨拶

まず初めに、元日の夕刻に発生した能登半島地震で亡くなられた方々に心からお悔やみを申し上げますとともに、被災された全ての皆様にお見舞いを申し上げます。中部森林管理局としましては、管内国有林における被害状況の迅速な把握に努め、被災を確認した場合には早期の復旧に努めていきます。また、民有林等についても、地方自治体と連携して、被害の把握及び復旧に向け可能な限りの支援を行っていく考えです。

当局管内には急峻・複雑な地形と脆い地質を有する森林も多く、今回のような地震のほか、台風等の豪雨の際にも度々被害を受けてきました。一年の初めの日に大きな自然災害に直面し、今後も幅広い関係機関や関係団体・事業者そして地域住民の皆様と連携を密にし、国有林はもとより民有林も含めた地域全体の防災・減災・災害復旧対策に万全を期さねばならないとの思いを新たにしたところです。

当局においては、こうした防災・減災分野に限らず、国有林の管理経営を行う中で培ってきた技術・ノウハウや組織力、国有林の多様なフィールド等を活かして、民有林の管理や民有林材を含む木材の需要拡大、さらには森林・林業以外の分野でもお役に立てるよう、国有林における取組のご紹介や関係者のニーズの把握、連携の呼びかけを積極的に行ってきました。

例えば、令和二年から本誌にシリーズ「お役に立ちます国有林」と題して民有林等で活用可能な取組事例を掲載し、当局ホームページでも公開してきており、昨年三月には、データを更新するなどホームページの内容を充実させました。また、同じく昨年三月から、「森林・林業に役立つＷｅｂ勉強会～現場で活用できる知識や情報・技術～」と題し、民有林関係者向けの情報提供及び人材育成の取組を続けてきましたし、同四月から六月にかけて、森林土木分野における工事等の省力化・効率化に資する「新技術・新工法」の提案の募集と応募企業からのプレゼンテーションを開催しました。さらに、同七月から八月にかけて、初心者でも効率良くニホンジカを捕獲できる「小林式誘引捕獲法」の導入・普及を目指した現地検討会を管内三県（長野、岐阜、愛知）の国有林において開催し、多くの関係者の皆様に参加いただきました。

こうした中、本年には「森林環境税」の課税が始まることとなっており、民有林における「森林経営管理制度」の推進など市町村の取組の一層の進展が期待されていますし、人工林の主伐が進む中でエリートツリー等の成長に優れ花粉も少ない苗木による確実な再造林と獣害対策が一層重要になってきています。また、アフターコロナの多様な国民ニーズに対応して森林空間を観光や健康づくり等に活用する機運も高まってきています。

このように、森林・林業に関わる課題やニーズが一層多様化・高度化することが予想されるところであり、当局としましても、地元自治体をはじめとする関係者の皆様との連携を強化しながら、地域における諸課題の解決のための取組を進めていきたいと考えています。

今年も、お役に立ちます国有林！

素材生産事業の現地検討会を開催

【愛知森林管理事務所】

十月三十一日、北設楽郡設楽町の段戸国有林の素材生産事業地において、民有林や木材市場の関係者及び素材生産請負事業体を対象に、「高齢級・大径木の効率的な伐倒・搬出・採材方法」をテーマとした現地検討会を開催しました。

本事業地は、林齢が百年生を超えるヒノキ人工林で、ここから搬出される良質な丸太については、「段戸ＳＡＮ」のブランドで販売を行うこととしています。

検討会では、大径木の伐倒について、事業を受注している事業体から、安全で、かつ割れが入るなど木材の価値を低下させない方法の説明を受け、実演していただきました。

また、木材は長さや太さによって、取引される単価が変動するため、木材市場の関係者から、木材の需要動向を踏まえた採材（丸太に切り分けること）について指導していただき、実際に伐倒された木を教材とし、参加者間で採材の検討を行いました。

なお、この現場から搬出された丸太については、十一月十七日に東海木材相互市場で開催された「全国優良材展示会」に出品し、高い評価を受け、販売することができました。

当事務所では、今後も計画的に高齢級林分からの木材供給を行っていくこととしていますが、長い間、大切に育ててきた木を安全かつ効率的に、品質にも配慮し伐倒すること、木材市場の需要動向を踏まえた丁寧な採材により販売する取組を林業関係者間で共有できたと考えており、引き続き「新しい林業」の実現、収支のプラス転換に向けて努力していきたいと考えています。

大径木の伐倒方法について検討する参加者

新しい林業の展開に向けた現地検討会を開催

【北信森林管理署】

十一月二十日、「新しい林業の展開に向けた推進チーム」による現地検討会を下水内郡栄村の鳥甲国有林において開催しました。

本推進チームは「従来の施業等を見直し、開発が進みつつある新技術を活用して、伐採から再造林・保育に至る収支のプラス転換を可能とする」の趣旨のもと、当署職員で構成し、本年度から活動しています。

管内には現在、コンテナ大苗植栽地における下刈回数削減に向けた実証モデル地として、黒姫森林事務所管内に二ヶ所、戸隠森林事務所管内に二ヶ所を設定しており、今回、新たに水内森林事務所管内に設定し、雪が降り積もる中、植栽木の成長調査等を行いました。

また、これに先立ち、十月三十日には「令和五年度生産性向上実現プログラム推奨事業地現地検討会」を飯縄山国有林の生産請負事業地において開催しました。

当日は、長野県及び長野市の林務関係者、管内の国有林内で生産請負事業を行っている事業体等、約三十名が参加し、本事業地の請負事業体から作業システムや生産性向上に向けた取組状況等について説明を受け、更なる生産コストの低減に向けた検討を行いました。また、意見交換では、当署管内の各生産事業地の取組や問題点、要望や意見等、様々な事項について、参加者の方々から発言していただきました。

検討会の結果を「新しい林業」の推進に役立てるとともに、今後も林業事業体や自治体関係者の方々の、生の声を聞く機会を定期的に設けてまいりたいと考えています。

植栽したコンテナ苗の成長調査

甦れ！初代大ヒノキ歩道
～見学コース整備に向けて～

【東濃森林管理署】

十一月二十二日、十二月八日、当署管内の加子母裏木曽国有林において、NPOつけち、裏木曽古事の森育成協議会によるボランティア活動が行われました。

当日は、毎年多くの方が訪れる「二代目大ヒノキ見学コース」の整備に加え、「初代大ヒノキ見学コース」の整備計画を関係者で実際に現地を見ながら検討しました。

初代大ヒノキは以前、本広報誌（令和三年一月号）でも紹介しましたが、切り株の直径が二メートルを超える推定樹齢九五〇年生のヒノキで、昭和九年の室戸台風で折損し、その後枯損が進み、昭和二十九年に学術参考のために伐採されたものです。

幸いにも、初代大ヒノキまでは、過去に使われていた歩道が現存しており、朽ちた丸太橋の架け直しや階段のつけ直し等を行い、林道口や歩道の分岐点に案内看板を設置することで見学コースを整備できることが分かり、早速、ボランティア団体から「冬の間に案内看板の作製を行います」との意見が出されるなど、新たな取組が動き始めました。

現地検討終了後には、参加者から「歩道整備が終われば、次は初代大ヒノキを風雪から守るために設置されている屋根の葺き替えもやりましょう」「初代大ヒノキ見学用の新しいガイドマニュアルを作成しないといけないね」など、力強い意見も出されました。

縁の下の力持ちとなって、地域の国有林を支えていただいている皆様方の取組や熱意に心より感謝いたします。

初代大ヒノキの切り株

国有林モニター現地説明会を開催

【企画調整課・東濃森林管理署】

十一月二十八日、東濃署管内において、十二名の国有林モニター参加のもと、現地説明会を開催しました。

国有林モニターの任期は二年であり、昨年度は木曽署管内において森林整備や木材生産、木材の販売や利用について視察し、今年度は治山事業や国有林の利用状況など、昨年度と違う視点で国有林野事業についての理解を深めていただきました。

当日は、中津川駅に集合し、マイクロバスにて「猿沢治山事業地」に向かいました。この治山事業地は、山腹工を大正十四年から、渓間工（治山ダム）を昭和十三年から実施しています。現在、国土強靭化を図るために進めている渓間工の施工状況を見学し、治山事業の目的や効果について説明しました。

次に、東濃署の会議室において「国有林みどころビューマップ」等のGoogleストリートビューを活用した国有林内の仮想的な散策について紹介し、東濃署のウェブサイトをご覧いただきました。

その後、加子母裏木曽国有林にて「五色沢治山事業地」の大規模な山腹崩壊の復旧状況を遠望しながら説明し、最後に「協定締結による国民参加の森林づくり」の一つである「裏木曽古事の森」を案内し、協定を結ぶ裏木曽古事の森育成協議会の活動などを紹介しました。

天候が不安定で、雨が強く降る場面もありましたが、「治山事業の役割や効果がよく理解でき、勉強になった」「古事の森で育った木材の価値を知りたい」など、国有林モニターの皆様からいただいたご意見、ご感想を今後の国有林野の管理経営に活かすよう努めてまいります。

裏木曽古事の森見学

「木曽悠久の森」管理委員会を開催

【計画課、木曽森林管理署、木曽森林ふれあい推進センター】

十一月二十九日、木曽署多目的ホールにおいて、令和五年度第一回「木曽悠久の森」管理委員会を開催しました。

「木曽悠久の森」は、世界的にも希少で貴重な存在であるヒノキ、サワラ等の木曽五木を含む温帯性針葉樹林を保存・復元するため、木曽地方の国有林に設定している「森林生物多様性復元地域」の愛称です。

天然林の保存を図りながら人工林を天然林に誘導していく取組について、学識経験者や地域関係者等で構成される管理委員会を設置し、ご意見をいただきながら取組を進めています。

今回の管理委員会は、

①令和七年に開催予定の御杣始祭をはじめとする伊勢神宮式年遷宮の行事に係る特殊用材（御用材）の伐採計画案

②赤沢自然休養林の散策路（駒鳥コース）において、木橋の老朽化により通行止めとなっている箇所の迂回路の設置

③ヒノキの古い根株を酸素同位体比分析することにより、樹齢を推定する取組

の三つを議題とし、公開で行いました。

管理委員会での審議に先立ち、委員による現地調査を行った上で、植生等に与える影響、取組の意義や方向性等について議論を行い、いずれの議題も出席委員全員の賛成により承認されました。

管理委員会の様子

なお、①については、前回（平成十七年）の御杣始祭の伐採跡地にて、伐採から二十年弱を経過して、サワラやヒノキ、広葉樹など多様な樹種による天然更新が順調に推移している状況を見ていただきました。

また、③の根株の年代推定については、これまでの取組により、根株が一六七〇年頃に伐採されたものであることや、根株の伐採時の樹齢が千年と推定されたことで、木曽ヒノキの寿命は千年より長いことが示唆されていますので、今後、年代推定のできた根株を赤沢自然休養林の散策ポイントとして来訪者に見ていただけるよう整備を進めることで、「木曽悠久の森」の価値や保存・復元の取組の必要性をＰＲしていきたい考えです。

「木曽悠久の森」の取組は、数百年の超長期に及ぶものです。引き続き、管理委員会の委員や地域の関係者等から意見やアドバイス等をいただきながら、一歩一歩、着実に取組を進めてまいりたいと思います。

迂回路設置予定箇所の現地調査

御杣始祭予定箇所の現地調査

ニホンジカ食害防除対策の現地検討会を開催～民国連携の取組～

【森林技術・支援センター・岐阜森林管理署】

十二月五日、ニホンジカ食害防除対策の現地検討会を開催しました。

ニホンジカによる森林被害は、再造林や適切な森林整備の実施に支障を及ぼしています。また、樹木の剥皮による天然林の劣化や下層植生の食害等により、その地域全体の森林が持つ公益的機能の発揮に大きな影響を与えています。

こうした状況の中、岐阜署では、防護柵の設置や、くくり罠による職員実施の捕獲などのニホンジカ被害対策に取り組んでおり、本年度は十一月末現在において、百二十六頭を当署職員により捕獲しています。

本検討会は、このような取組について、地域の林業関係者との情報共有や意見交換を行うことにより、効果的な対策の実施を目的に平成二十八年度から毎年開催しており、本年度は岐阜県及び地元市町の担当者など四十五名が参加しました。

午前中は、神渕コミュニティセンターにて、岐阜県森林研究所の片桐主任研究員を講師に迎え、「ニホンジカ対策の現状と課題」と題し、ツリーシェルターの種類の違いによる苗木の成長に及ぼす影響など、貴重なお話を聞かせていただき、当局職員からは、「小林式誘引捕獲法」の紹介などを行いました。

午後からは、七宗国有林に展示している箱罠や囲い罠、防護柵、単木保護資材を視察し、参加者間で意見交換を行い、くくり罠の設置体験もしていただきました。今後も民国の関係者が情報を共有し、一体となった対策を着実に推進していくことが重要だと考えています。

参加者によるくくり罠設置体験

信州大学で森林・林業の現状と課題について講義

【南信森林管理署】

十二月十一日、上伊那郡南箕輪村にある信州大学農学部において、農学部二年生約四十名を対象に今泉局長が「森林・林業とSDGsそして国有林の果たすべき役割」と題し、講義を実施しました。

例年要望を受け、実施している本講義は、これから専門課程を選考する大学二年生に対して、森林・林業に対する国有林の取組等について広い視野で学んでいただくことを目的に行われています。

今泉局長は、森林・林業とSDGsとの関わり、環境・経済・社会のそれぞれの観点から見た森林・林業に係る最近の動向や課題、国有林の貢献等について、話題や自らの問題意識・疑問点も織り交ぜながら、学生の皆さんに多様な視点を持って考えていただくきっかけになればと話していました。

講義の後半では、当署の若手職員が「森林管理署の業務について」と題して、講義・説明を行いました。若手職員は、管内概要や自分たちの職務経歴、現在の業務内容のほか、生活スタイルといった業務外のことにも触れ、国有林の職員として働くことをイメージしやすくなるよう工夫していました。

講義のあと、参加した学生から多くの質問があり、中には「転勤の回数が多いのはなぜなのか」といった国有林での仕事について具体のイメージをもって質問した学生もいました。終始良い雰囲気の中で実施された講義は予定時間を少しオーバーしましたが、国有林の仕事を次世代に対して十分にPRでき、森林や林業への興味・関心を高めてもらえたという手応えを感じることができました。

若手職員２名による講義

シリーズ

森林官からの便り

国有林の現場の最前線で、働く森林官の仕事や、管轄する地域の特色などを紹介します。

【東濃森林管理署
恵那森林事務所】
森林官　森下 佳宏

恵那森林事務所は、岐阜県中津川市の南部に位置しています。中津川市は、リニア中央新幹線の岐阜県駅が建設されることでも注目されており、当事務所周辺では着々と工事が進められています。

恵那山（岐阜県側から望む）12月上旬撮影

当事務所は「恵那山」を基点に落合恵那・中津恵那・阿木恵那の三つの国有林を管理しています。雄大にそびえる恵那山の標高は約二、二〇〇メートルであり、黒井沢ルートの登山道は、令和二年七月の記録的豪雨により林道が崩壊し、未だ通行できない状況ですが、他にもルートがあるため、登山シーズンになると数多くの登山者で賑わっています。どのルートも歩道が整備されており、歩きやすく楽しく登れる山です。かつては「胞山」と呼ばれ、名前の由来とされています。興味のある方は、ぜひ登ってみてください。

また、当事務所管内には、「焼岳」、「天狗洞森山」、「赤滝」といった見所もあります。日帰りで楽しめるため、観光客や地元の方々に親しまれています。

森林官の業務は、主に各種調査、生産・造林事業等の監督、境界巡検・巡視、獣害対策に従事しています。また、地域住民や入林者と接する機会も多いことから、管内での事故や熊の被害にあわないよう強く呼びかけています。

■未来の担い手へのメッセージ

自然相手で常に危険と隣り合わせの職場ですが、安全第一で職務に励んでいます。業務内容は幅広いものがありますが、自分の考えを取り入れ生かせる職場です。これから国有林を管理していくためには、若い力が必要です。

赤滝

着手前の請負者へ事業説明・指導

シリーズ

「私の森語り」

森林・林業との関わりの中で、様々な課題に挑戦されている方の取組を紹介します。

「川を育む森を思う」

豊田市矢作川研究所
主任研究員
洲崎 燈子（すざき とうこ）

■自己紹介

矢作川は長野県の大川入山（標高一、九〇八メートル）を源とし、長野・岐阜・愛知の三県を流れて三河湾に注ぐ一級河川です。

豊田市矢作川研究所は「一つの川に一つの研究所」を合言葉に、三十年前の一九九四年、矢作川漁協、枝下用水土地改良区（現豊田土地改良区）、豊田市による第三セクター方式で設立されました（二〇〇三年には豊田市役所に編入）。私は一九九八年の入所以来、矢作川流域の河畔植生や水源林、里山の現状と成立過程、望ましい管理手法等の調査・研究に携わっています。

矢作川を遡上する天然アユ

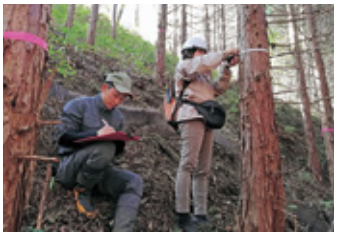
■活動内容

当研究所は、川の豊かできれいな水の回復と、人々の生活にうるおいとゆとりを与える河川環境づくりをめざして、以下の三つを軸に活動を行っています。

①流域の生物学的・人文学的研究
②研究成果と流域情報の公開
③流域環境の保全に関わる諸団体の連携のサポート

主な研究テーマとしては、川と海を回遊する天然アユを指標種とした水生生物のすみやすい河川環境づくりや、自発的に水辺愛護活動を行っている地域住民への情報提供や活動目標づくりを通じた支援に取り組んでいます。

地域住民の活動による川辺の風景の変化



水源域の人工林調査

■メッセージ

矢作川流域は大企業の城下町を抱えながら自然が豊かで、住民が地域の自然に深い思い入れを持ち、保全活動をしてきた長い歴史があるのが特徴であり、魅力です。

この流域の七割を森林が占めていますが、森林で最も広い面積を占めているのが人工林で、次いで多いのがコナラなどの里山林です。これまでに流域の森づくりや木づかいに関わる皆さんと一緒に、市民参加型の人工林調査「森の健康診断」の開発と運営や、矢作川流域圏懇談会による「流域圏担い手づくり事例集」の作成に取り組んできました。

今後も、川の水の恵みを受けている中～下流部の住民も巻き込んだ人工林や里山林の再生をお手伝いしていければと思っています。

○連絡先
〒471－0025
愛知県豊田市西町2－19
豊田市職員会館一階
電話／0565－34－6860
http://yahagigawa.jp/

シリーズ
中部の保護林（第33回）

特異な圏谷地形の高山植物群落

薬師岳・雲ノ平圏谷群高山植物遺伝資源希少個体群保護林

設定目的

薬師岳（二、九二六メートル）の東側斜面一帯には、氷河によってできた圏谷（カール）が広がっており、その特異な地形に希少な高山植物が生育していることから、これらの個体群の保護・管理をしています。

地況・林況

当保護林は、飛騨山脈（北アルプス）の奥黒部山地に位置しています。薬師岳の東斜面に並ぶ四つの圏谷は、我が国で確認されている中で最も発達したものであり、学術上の価値も高いため国の特別天然記念物「薬師岳の圏谷群」に指定されています。

稜線付近には、ハイマツや雪田植物が群生しており、貴重なライチョウの生息地になっています。

所在地
富山県 富山市

国有林野には、世界自然遺産を始めとする原生的な森林生態系を有する森林や、希少な野生生物の生育・生息の場となっている森林が多く残されています。

国有林野事業では、1915年（大正4年）以降、こうした貴重な森林を「保護林」として設定し、森林や野生生物等の状況変化に関する定期的なモニタリング調査を実施して、森林の厳格な保護・管理を行っています。

お問い合わせ先：計画保全部計画課　ダイヤルイン：026-236-2612

※詳細は、コードを読み込んでください。

シリーズ

秘蔵写真

今は昔の林業

第33回

中部森林管理局総務課
井上（いのうえ）　日呂登（ひろと）

今は昔、山村に暮らす人々とその生業としての林業を当局秘蔵の写真とともにご紹介します。

「スキー」

日本におけるスキー史の始まりは、諸説あるものの明治四十四年に新潟県高田（現在の上越市）で陸軍がオーストリアのスキー術の指導を受けてからとされます。この後、急速にスキー術は各地に広まるのですが、国有林においても早くから注目され、大正五年には東京大林区署（後に長野営林局となる組織の一つ）より「森林保護上のスキーの効用」という資料が出されています。雪の森林地域の移動に有用であるという点が重要だったのでしょう。初期のストックは一本杖で、スキー板もケヤキ材の重たいものがあったようです。

大正12年　スキーを用いた林内移動の様子
（現在の中信森林管理署管内）

昭和十一年　林業訓練の若者達のスキー風景
（現在の飛騨森林管理署管内）

その後、雪の多い地域の国有林の職員にとって、スキーは冬の森林内での移動や調査などの業務をこなすための身近な道具となっていきました。職場内でのスキー講習会・スキー大会もしばし開催されましたが、当時のスキー大会の種目には森林の巡視や樹木の測定も含んだ競技があったようです。

昭和初期から十年代になると一般社会にもスキーはスポーツ・レジャーとして広がっていきますが、国内のスキー場にリフトが設置されるのは戦後のことですから、かつてのスキーは自分で担ぐなどして山に登った後に滑るものでした。

昭和三十年頃
樹木の直径を測定しながら行われたスキー競技
（現在の飛騨森林管理署管内）

ここで紹介している写真は、当局サイト「モノクロ森林紀行」で紹介しております。

これは、カラー写真のない時代へ時を超えて！むか～しの写真を紹介するサイトです。

当サイトへは、コードを読み込んでください。

令和６・７年度 国有林モニター の募集について

中部森林管理局では、令和６・７年度の「国有林モニター」を募集しています。

この募集は、中部森林管理局管内（富山県、長野県、岐阜県、愛知県）にお住まいの皆様に、国有林が果たしている役割や現状（森林の整備、木材の供給、森林とのふれあいの場の提供等）をご理解いただくとともに、国有林に対するご意見等を直接伺い、今後の管理経営に役立てていく取組の一環として行っています。

国有林モニター依頼期間中は、定期的に林野庁や森林管理局の広報資料等をお送りします。

募 集 人 数：30名

依 頼 期 間：令和６年４月１日から令和８年３月31日まで（２年間）

依 頼 内 容：①国有林や森林・林業に関するアンケート調査への回答
②国有林の管理経営に関するご意見、ご要望等の提出
③モニター会議、現地見学会への出席（旅費のみ支給）

応 募 資 格：管内在住の満18歳以上（令和６年４月１日時点）で
電子メールにより情報を受信できる方

応募方法等：局ホームページの専用申し込みフォームよりご応募ください
（郵便でも応募可）

応募締切：令和６年２月16日（金曜日）必着

※これまでの活動内容については、局ホームページをご覧ください！

令和４年度
現地説明会の様子
（赤沢自然休養林）

令和５年度
現地説明会の様子
（猿沢治山事業地）

お問合せ先：企画調整課　国有林モニター担当　　電話０５０－３１６０－６５０８

編集長だより

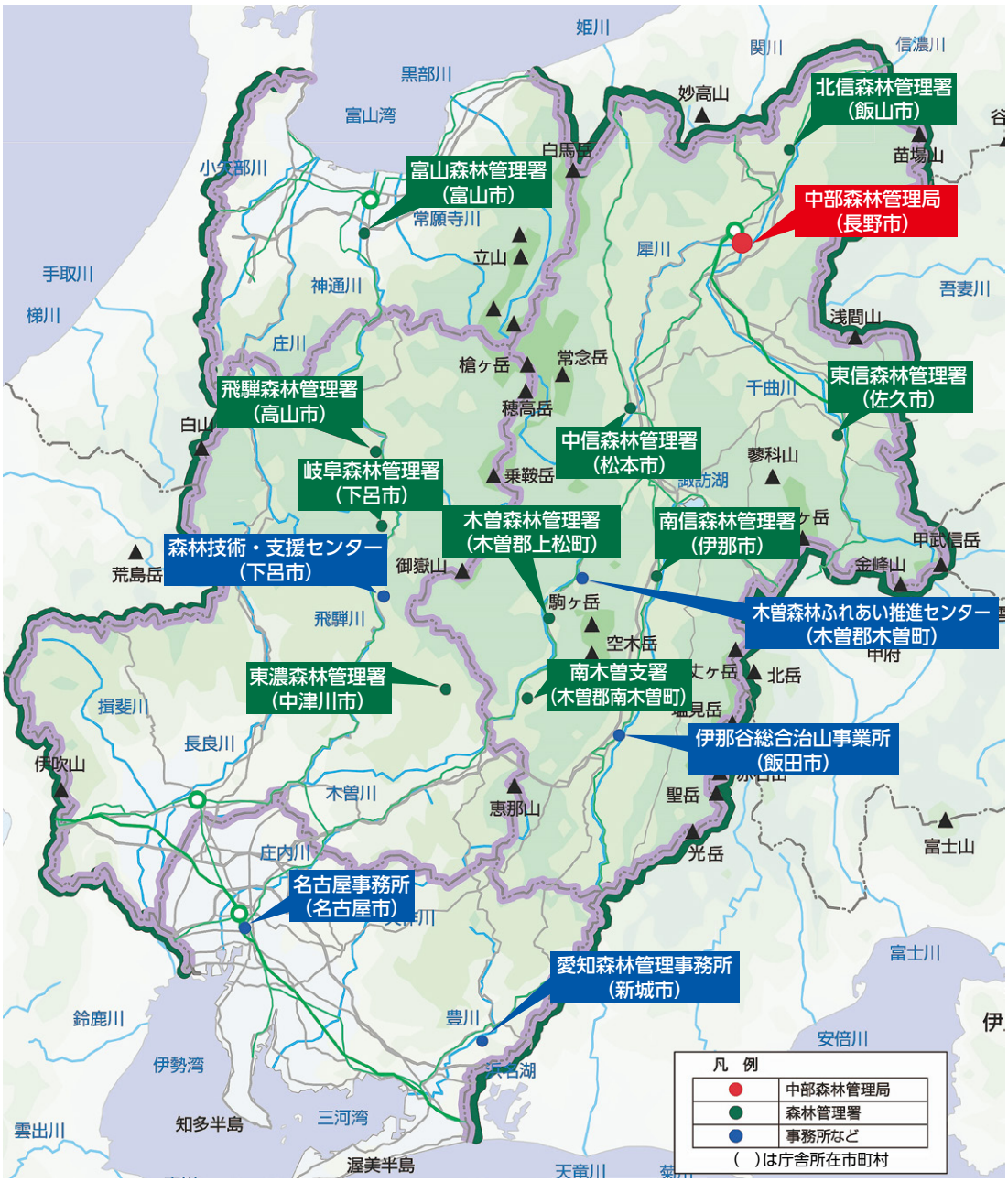
（中部の森林へのご意見・ご要望等の投稿は、
migoro@maff.go.jpまで電子メールでお送りください。）

この度の能登半島地震によりお亡くなりになられた方々に謹んでお悔やみ申し上げますとともに、被災されました皆様に心よりお見舞いを申し上げます。また、被災地において救助活動や支援にあたられている方々に深く敬意を表します。

1月1日、中部森林管理局においても災害対策本部を設置し、職員や家族の安否確認、建物の点検、情報収集などを行い、1月5日には富山県と共同で富山県西部と東部の国有林及び民有林における被害状況等の調査をヘリコプターを使用して上空から実施しました。その他、各出先機関や関係団体等と協力し、災害の応急対策に必要な資材を石川県庁に届けるなどの対応を行っております。

上空からの調査の結果、今回の地震による新たな崩壊地は確認されませんでしたが、引き続き、積極的に関係機関等と連携し、各種対応を行ってまいります。

12.立山雪景色2（富山署管内）



中部森林管理局のホームページ等へのアクセスは、以下を読み込んでください。

中部森林管理局
ホームページ

広報
「中部の森林」

用語の解説

本誌文中に掲載している主な専門用語・業界用語を解説。

名古屋事務所	〒456-8620	愛知県名古屋市熱田区熱田西町1-20	TEL 050-3160-6660	c_nagoya@maff.go.jp
富山森林管理署	〒939-8214	富山県富山市黒崎字塚田割591-2	TEL 050-3160-6080	c_toyama@maff.go.jp
北信森林管理署	〒389-2253	長野県飯山市大字飯山1090-1	TEL 050-3160-6045	c_hokushin@maff.go.jp
中信森林管理署	〒390-0852	長野県松本市島立1256-1	TEL 050-3160-6050	c_chushin@maff.go.jp
東信森林管理署	〒384-0301	長野県佐久市臼田1822	TEL 050-3160-6055	c_tohshin@maff.go.jp
南信森林管理署	〒396-0023	長野県伊那市山寺1499-1	TEL 050-3160-6060	c_nanshin@maff.go.jp
木曽森林管理署	〒399-5604	長野県木曽郡上松町正島町1-4-1	TEL 050-3160-6065	c_kiso@maff.go.jp
南木曽支署	〒399-5301	長野県木曽郡南木曽町読書3650-2	TEL 050-3160-6070	c_nagiso@maff.go.jp
飛騨森林管理署	〒506-0031	岐阜県高山市西之一色町3丁目747-3	TEL 050-3160-6085	c_hida@maff.go.jp
岐阜森林管理署	〒509-3106	岐阜県下呂市小坂町大島1643-2	TEL 050-3160-6090	c_gifu@maff.go.jp
東濃森林管理署	〒508-0351	岐阜県中津川市付知町8577-4	TEL 050-3160-5675	c_tohno@maff.go.jp
愛知森林管理事務所	〒441-1331	愛知県新城市庭野字東萩野49-2	TEL 0536-22-1101	c_aichi@maff.go.jp
森林技術・支援センター	〒509-2202	岐阜県下呂市森876-1	TEL 050-3160-6095	c_gijutsus@maff.go.jp
木曽森林ふれあい推進センター	〒397-0001	長野県木曽郡木曽町福島5473-8	TEL 0264-22-2122	kiso-fureai@maff.go.jp
伊那谷総合治山事業所	〒395-0001	長野県飯田市座光寺5152-1	TEL 050-3160-6075	

発行：林野庁 中部森林管理局
編集：総務課 広報
〒 380-8575 長野県長野市栗田 715-5
電話：026-236-2531
Mail：migoro@maff.go.jp
http://rinya.maff.go.jp/chubu/

メールマガジンに登録いただくと、広報「中部の森林」を発行日と同時にデジタル版を毎月配信します。
（毎月 10 日発行※編集の都合で、発行日が遅れることもあります）
登録サイト https://mailmag.maff.go.jp/m/entry

本誌に使われている紙は、日本の森林を育てるために間伐材を積極的に使用しています。